魔法少女リリカルなのは～紅月の守り人～

天空　翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは～紅月の守り人～

【Ｎコード】
Ｎ３１６７Ｚ

【作者名】
天空　翼

【あらすじ】
月食、それは月が紅くなり空に食われて行く現象である。そんな月食の日に現れた一人の少年、人々は彼を『赤月の守り人』と呼んだ…

プロローグ　徘徊者（プロセス）を狩る者（前書き）

月食を見て思いついた小説ですｗｗ

プロローグ　徘徊者（プロセス）を狩る者

月食、それは月が紅くなり空に食われて行くような現象…

そんな月食の日は気をつけなければならない…

何故なら…

「ｇｕｒｕｒｕｒｕｒｕｒｕ…」

「え？」

「ｇａａａａａａａａ！！」

「キャァァァァァァァ！！！」

バキッゴキュッ

この世あらざるモノが活発に徘徊する時だからである…

プロローグ　徘徊（プロセス）者を狩る者

「まったく、月食の日はいつにも増して『徘徊者(やつら)』が多い…」

『仕方がないよマスター。月食は『徘徊者(プロセス)』が一番活発になるときだからね。』

赤髪に紅眼の小学校高学年ほどの少年が紅い刃の大鎌を持って面倒くさそうに呟いた。
それに大鎌に付いている赤黒い宝石が光って少年の声をだし相槌をうつ。

『あ、もう一匹近くにいるよ。』

「チッ、仕方がねぇ。とっとと狩(ヤ)るぞ。」

『そうだね、サクッと狩ってサクッと帰ろうか。』

少年は月をバックに異形の前に立ちはだかる。

「お前の魂、狩らせてもらおうか…月の前でな。」

第一話　それは運命を変える出会いでした

「くっそ、何なんだこいつらは！？」

時空管理局勤務、クロノ・ハラオウンは魔力弾を放ちながら異形と戦っていた。

「くっ、数が多すぎる…！」

既にクロノは大多数の異形に囲まれていた。
空を飛ぶモノ、土に潜るモノ、姿形は様々だがどれも不気味なフィンキを出しているのは変わりなかった。
念話も何故だか繋がらないこの状況で救援を呼ぶという選択肢は既に絶たれていた。

「どうすれば…もう魔力が…！」

クロノはギリッと歯を食いしばる。

「ここまでか…」

異形の一体がクロノにその鋭い爪を振り下ろす！

ガキィンッ！！

金属がぶつかり合う音がする。
クロノに痛みは襲ってこない。
恐る恐る目を開いてみると赤い刃の鎌と異形の爪が交差していた。

「またか、やっぱり月食の日は面倒だな…」

『しかも最近増えてますしね、月食…』

鎌形のデバイスを持つ少年のぼやきにデバイスが答える。

「それだけ徘徊(やつら)者の動きが活発化して来てるってことだろ？」

『まぁそうですね。サッサと終わらせましょうか。』

「あぁ。あ、そこの人、ちょっと下がっといて。すぐに終わるから…」

少年は異形から飛びのいて距離を取ると鎌を両手で持ち構える。

「お前達の魂、狩らせてもらおうか…月の前でな。」

少年はそう言うと異形に物凄いスピードで切りかかった。

ザシュッ！

音が響き異形の体が上半身、下半身真っ二つに切り裂かれる。

返り血を浴びた少年は別の異形の姿を捉えるとまたもや切りかかる。

それを見てクロノは確信した。

（つ、強い…！）

ダンッと音を立てて少年が空中を舞うように飛ぶ。

「ブラッド・ムーン・ブリザード…」

静かにそう少年が言うと異形の周りにいくつもの無数の魔法陣が現れ三ケ月型の紅い刃がまさにブリザードの様に異形を切り裂いていった。

「「「gyaooooooooooooooooooo!!!!!」」」

異形達は悲鳴（というか奇声）を発し灰になっていった。

「こんなもんか。っと、そこの人、大丈夫？」

振り返った少年の姿が月明かりで照らされる。

黒いロングコートに赤い服、ジーパン、そして赤髪に紅眼。

所謂世間一般で言うイケメンと言う奴であろうその少年はクロノに手を貸し起き上がらせる。

「あ、あぁ。助かったよ。君は？あの化け物について何か知ってる様だけど…」

クロノも恩人に手を出す様な無粋な真似はしない。

「俺？俺は好きに呼んでよ。それと君さ、それが知りたかったら明日の午前１０時、翠屋って言う喫茶店で待っててて。あ、管理局の人には言っちゃダメだよ？」

「わ、わかった…」

「じゃ、おやすみなさい。月食の日は、月が紅くなる日は気をつけてね。」

「え…？」

少年はそう言うとにっこり微笑んでタンッと音をたてて夜空へと消えて行った。

第一話　それは運命を変える出会いでした

クロノは考え込んでいた。
あの時はつい彼の隠された威圧感に押されてしまい頷いてしまったがやはり艦長である母に今回のことを報告しなければならない。
しかし恩人である彼の頼みを破ることも良心が痛む。
考えた末、クロノは彼から話を聞いたあと、話すか話さないかを判断することにした。
そして翌日…

翠屋でケーキを食しながら、待っていると１０時ピッタリに彼が来た。

「ゴメンな、待たせた？」

「いいや、１０時ぴったりだよ。そうだ、自己紹介がまだだったね。僕はクロノ・ハラオウン。」

「俺は…名前は事情があって教えられないから好きに呼んでくれ。例えば紅とか。」

「わかったよ紅。単刀直入に言うけど昨日のアレは何なんだ？」

クロノは気になって仕方なかったことを聞いた。

「あぁ、アレね。ついて来て。」

少年はクロノについて来いと言い歩きだした。
慌てて勘定を払いクロノも店を出てついて行く。

少年が入って行ったのは裏路地のバーであった。

「マスター、コーヒー２つ。」

少年は注文するとクロノに横に座る様に言う。

クロノが座ると少年は話し始めた。

「アレは徘徊者（プロセス）。夜に姿を現し人間を襲い食す化け物だ。そしてアレの正体はＰＲＳＳ（プロス）ウイルスにかかった人間なんだ。」

「ＰＲＳＳ（プロス）ウイルス？」

「信じられないかもだけど、そのウイルスは管理局の闇が人体実験を行って作ったウイルス兵器だ。」

「何だって！？」

クロノはガタンと椅子から立ち上がる。

「君も管理局の闇には薄々感づいてるだろ？」

「っ！」

クロノはたしかに管理局の闇には感づいていた。
だが認めたくなかった。母親と自分の属する組織が裏で非道的なことをしてるなど…

「……ＰＲＳＳ（プロス）ウイルスとは何だ…？」

「体を超人的になるよう改造し主人の命令には忠実に従うように人間を兵器へと変える恐ろしいウイルスだよ。」

「そんな…！！」

「ある日実験の為、一人の被験者がこのウイルスを打たれた。そして異形の怪物…徘徊(プロセス)者になった。研究所はその徘徊(プロセス)者によって壊滅。そしてその徘徊(プロセス)者は他の人間に噛みつき自分の中のＰＲＳＳ(プロス)ウイルスを注入し繁殖していった。」

「…」

「ねぇ君、世界を変えてみない？」

「え？」

「管理局に行っても上がもみ消しちゃう。ならいっそのこと管理局に反抗するんだ。」

「し、しかし…！」

「誰かがやらなきゃいけない。そうしなきゃいつまでもこのままなんだよ。もしかしたら、これからも別の被験者の人が犠牲になるかもしれないよ？」

クロノは黙る。

「やっぱり君も同じなんだね。自分のことばかり…。目の前で苦しんでいる人を助けないで、何が正義だよ…！」

少年は出されたコーヒーを飲むとクロノの分も勘定を置いて立ち上がる。

「気をつけて。徘徊(プロセス)者は月食のときに活発化する。あと…」

少年は去る。

「仲間になってくれるんだったら、明日の夜１２時。海鳴公園に来て。」

と言う言葉を残して…

第一話　それは運命を変える出会いでした（後書き）

つーわけで第一話！
今までにないクロノが主人公のアンチ管理局小説スタート！次回もお楽しみに！

第二話　氷の砲魔師、クロノ・ハラオウン

クロノは自室でずっと考え込んでいた。

《管理局に行っても上がもみ消しちゃう》

わかってはいる。だが管理局に反抗すると言うのがどうしても彼の選択肢には浮かんで来なかった。
考えた結果、彼は母親に相談することにした。

「どうしたのクロノ？」

出迎えてくれる母、リンディにクロノは俯きながらポツリポツリ話し始めた。
これは絶対他言無用ということも言い聞かせ。

「…まさか彼方が管理局の闇に気づくなんてね…」

「母さ、艦長は知ってたんですか！？」

「えぇ。でも、気づきたくなかったのかもしれないわ。彼方と同じで目を背けていた。」

「僕はあの恩人である人物の言葉で否が応でも気づかされました。でなきゃあの化け物は説明がつかないから。僕はどうすれば…！」

「彼方はどうしたいの？」

リンディの声に顔を上げるクロノ。

「僕は…」

「気持ちに嘘をつかないでしたいようにしなさい。母さんは、私は何も言わないわ。」

「僕は…」

《これからも別の被験者の人が犠牲になるかもしれないよ？》

《目の前で苦しんでる人を助けないで、何が正義だよ…！》

「艦長、今までお世話になりました。」

クロノは頭を下げた。

「僕は自分の生きたい様に、新たな信念を持って生きます。たとえ貴女と敵対しようと、自分の信念を貫き通します。」

「応援してるわよクロノ。」

「はい！」

クロノは自分の答えを見つけすぐに旅立ちの準備をした。
自分は2度とここには戻らないと薄々感づいてはいたから。

第二話　氷の砲魔師、クロノ・ハラオウン

「来たね…」

少年は振りかえった。服装はあの出会ったときの物だ。

旅行カバンを持ったクロノはまっすぐと彼を見つめた。

「あぁ。僕は君の仲間になる。そして管理局の闇を潰して苦しんでる人を助ける！」

「そう。ありがとう。じゃあ行くよ。」

少年は装飾の施された鍵を持つと近くの公衆トイレの錠にその鍵を差し込んだ。

ドアを開けるとそこは緑色の草が生えており色とりどりの花が生えている草原だった。

その草原の中に立派な赤い屋根のお屋敷があった。

「ここが俺のプライベートワールドだ。」

「す、凄い…」

クロノは自分の部屋に案内される。

キングサイズのベッドに高級そうなソファー、巨大薄型テレビに白いテーブルクロスが敷かれた小さな木製のそれでも高そうなテーブル。

専用の風呂に洗面台にトイレ。

クロノはその豪華さに唖然とする。

「気に入ってくれたか？」

「何かいろいろ豪華でちょっと申し訳ない気もするよ。」

「そっか。これ、部屋の鍵。」

「あぁ、ありがとう。」

「あ、君のデバイス貸してよ。すっごく良いデバイスにしてあげる。」

「できるのか？」

「あぁ、徘徊者（プロセス）と戦う為にも強化しとかなくちゃ。すぐ終わるから大丈夫。」

クロノはカードになって待機しているデュランダルを渡した。

そして少年が部屋を出ていくと早速、カバンの中の物をタンスに入

れ始めた。

「できたよ。」

全ての荷物を出し終えた頃その言葉とともに少年が入ってくる。

「これが君の持っていたデュランダルを進化させた君だけのインテリジェントデバイス、アイス・デュランダルだ。」

少年が渡したデュランダルは淡い水色の雪の結晶のネックレスになっていた。

「ありがとう紅。」

クロノは礼を言った。

「これから君をビシバシ鍛えてくから覚悟して置いてよね。準備ができたら玄関に来て。修行開始だよ。」

少年はそう言うと部屋を再び出て行く。

「ビシバシか…」

クロノは待機状態のデュランダルをしっかりと持つと自分に意気込みをいれ玄関に向かった。

少年とクロノは青空にデバイスを向けバリアジャケットを展開する。

「アイス・デュランダル！」

「クリムゾンホープ！」

「「セットアップ！」」

2人の体が淡い紅色と淡い水色に包まれる。

少年は赤いTシャツに黒いロングコート、黒いネクタイにジーパンと茶色のブーツと言った姿になる。
デバイスは赤い刃の鎌になった。

対してクロノは淡い水色で縁取った白いケープに下は同じように、淡い水色で縁取った白いロングコート。

ズボンは青色で靴は白いブーツと言う姿になり髪と瞳の色も青紫になった。
デバイスは先端が水色をした雪の結晶ようになっており中心に青色の宝石が埋め込まれている。

「これが新しい僕のデバイスとバリアジャケット…！」

「じゃあ行くよ！」

少年とクロノが空中に飛ぶと同時に修行がスタートした。

「火岩烈打（かがんれつだ）！」

少年が近くの岩を砕き魔力の炎をまとわせクロノに発射する！

「アイス・ストーンズ！」

クロノはそれを魔法陣から現れた大きな氷のつぶてを向かわせ打ち消した。

「ならこれはどうだ！？インビジブル！」

少年はその場から消える。

『マスター・クロノ！後ろです！』

クロノはデュランダルの言葉で後ろへ振り向く。
振り下ろされた赤い鎌の刃をデバイスで受け止めた。

「くっ…！」

「アップ・ザ・ブースト！」

少年が叫ぶと魔法陣が少年の足の裏に現れるとそこからブースターのように炎が発射された。
クロノは徐々に押されこれ以上は無理だと思いそこから空中でバックステップで飛びのいた。

「悠久なる凍土、凍てつく棺うちにて永遠の眠りを与えよ」

雪が降り出し段々と少年が凍っていく。

「凍てつけ！」

その言葉を言った瞬間少年は完全に凍りついた。

しかし！

「な、なに！？」

少年は体を炎で包み氷を溶かした。

「確かに強い威力だ。でも、詠唱してる間の隙が大きいし何より俺みたいなやつには時間稼ぎにもならない…よし！クロノ、修行は終了だ。課題が見えた！」

少年はそう言うと地上に降りる。

「あ、あぁ。」

クロノも地上に降り立つ。

「課題は見えたからあとはそれをこなしていけばいい。数日で徘徊(プロ)者(セス)とも戦えるようになる。」

「そうか…」

「修行が終わったらルヴェラって管理世界に行って徘徊者(プロセス)狩りだ！」

「了解！」

そしてクロノは自分の部屋に戻り風呂に入ってパジャマに着替えたあとベッドに寝転がった。

「ハァ、母さんはどうしてるだろうか。またお茶に砂糖でもいれてるのかな？」

『マスター・クロノ。いきなり初日からホームシックですか？』

「そうみたいだ。」

『ルイス・レッド・ルーラー…』

「え？」

『彼の名前です。マスター・クロノがホームシックになったら教えるよう言われてました。』

「ルイスか…良い名前だ。」

クロノは少年の名前を知ったおかげか少しホッとした。

「よしっ！明日から修行だ、頑張るぞ！」

クロノは自分にそう言い聞かせると布団をかぶり眠った。

「クロノ・ハラオウン…さしづめ彼は氷砲魔師（アイスオブブレイカー）ってとこか？あ、そうだ。彼の二つ名これにしよう。」

少年、ルイスは自分の部屋のバルコニーにてゆったりと茶を飲んでいた。

第二話　氷の砲魔師、クロノ・ハラオウン（後書き）

次回は修行ダラダラ続けても意味ないんでルヴェラでの初VS（プロセス）徘徊者戦です！

キャラ紹介

ルイス・レッド・ルーラー

クロノやなのはの世界を含んだリリカルなのはの世界の万物を司る神。
外見年齢は普段はクロノと同じ背丈の１２歳ほどの少年だが本来なら１００００以上はゆうに超えている。
本来の姿は１７歳ほどの青年。
赤い腰までの長髪に紅眼が特徴。

魔力量や魔導師ランクはどんな凄腕魔導師よりも上をいくがあまり世界で力を使っては世界に歪みができてしまうので力を半分置いてきたらしいがそのような素振りは一切見せずにどんなことも余裕でやってのける。
魔力光は淡い紅色。
バリアジャケットは赤いＴシャツに黒いロングコート、黒いネクタイにジーパンと茶色のブーツ。

徘徊（プロセス）者が現れたことで歪んでしまった世界を元に戻す為、地上に降り立った。
徘徊（プロセス）者を狩っている途中にクロノと出会う。

普段は優しい性格の神だが戦闘となると感じが変わる。一人称は俺。

クロノ・ハラオウン

時空管理局局員の少年。
年齢は１５歳の少年だが精神が大人。
黒目黒髪が特徴。

魔力量や魔導師ランクはルイスの力を分け与えられたおかげか管理局所属のころよりぐんとアップしなのはやフェイトとさしで戦って余裕で勝てるほどになった。
魔力光は淡い水色。
バリアジャケットは淡い水色で縁取った白いケープに淡い水色で縁取った白いロングコート、青色のズボンに白いブーツ。
バリアジャケットを纏うと髪と瞳の色も青紫になる。

徘徊（プロセス）者に襲われたところをルイスに助けられる。
その後、管理局の闇を知り管理局を抜けルイスの仲間になった。

普段はクールだが生真面目なせいかいろいろと女性にからかわれることが多い。一人称は僕。

第三話　徘徊者（プロセス）狩り

「さて、これから実戦だ。まぁ、これからの方針を決めるテストでもあるからな！」

「わかった。」

クロノは頷く。

今彼らがいるのはルヴェラ。

管理世界の一つである。のどかな自然に心癒される田舎の世界でもある。

「ここには確認してるだけでもレベル１の徘徊者（プロセス）が５体いる。いざとなったら助けるけど本当に危険なときだけ、それ以外は自分で乗り切るんだ。」

「あぁ。ここでつまづいてるようじゃ世界を変えるなんてできるはずもないからな。」

クロノはそう言うとデュランダルを起動させる。

「アイス・デュランダル、セットアップ！」

『セットアップ』

クロノはバリアジャケットをまとい杖になったデュランダルを持つと空中へと飛びたった。

第三話　徘徊(プロセス)者狩り

「空中から敵を探すか…」

クロノはある場所で止まるとサーチ魔法を使う。

「冷気よ、この世界の全てを教えたまえ…サーチ・アイスエアー！」

クロノが杖を持って一回転すると冷気があたりに散っていった。

「右の方角に2体人間に化けている…よし！」

クロノは西の方に向かって飛んでいった。

「っ！見つけた！」

見ると徘徊(プロセス)者が人に噛みついていた。

「た、助けてくれぇぇ！」

「その人から離れろ！ブリザード・レボリューション！」
クロノがデュランダルを徘徊者（プロセス）に向けると竜巻のようになった雪が氷の槍になりいくつも徘徊者（プロセス）を貫いた。
「ふぅ…助かりましたぁ。ありがとうございますっ！！」
「いえ。それでは。」
クロノは去り際にその人がウイルスに感染してないか確認すると飛びたって行った。
おそらくは注入される前にクロノが撃退したのだろう。その人は何事もなかった。
そのままクロノは次々とサーチ魔法で徘徊者（プロセス）を見つけだし倒していった。
「ハイ終了。お疲れ様ー」
ルイスが指を鳴らすとピクニックセットが出てくる。ルイスはクロノにお茶を淹れる。
「はい。」
「ありがとう。」
「で、慣れてきた？」
「まだちょっと怖いけどね…人間が兵器になった姿を見るなんて…

ワクチンは本当にないのか？」

「あって打ってもあそこまで変貌した体は元には戻せない。」

「っ！そう、だな…」

「まぁ、あるっちゃあるんだけどな…あれ使うと世界が余計に壊れるし…」

最後にボソリとルイスが呟いた。

「まぁ、とにかく俺達の目的は…」

「この世に在る全ての徘徊者（プロセス）の抹消！」

「そうしなきゃ世界がどんどん狂っていく…。今のままでも崩壊し始めそうなのにな。」

「何か言ったか？」

「いいや、なんにも。」

ルイスはそう言って誤魔化した。

「さぁ、戻ったら『アレ』を完成させなきゃ！」

「あぁ！今日こそ成功させるぞ！」

彼らは意気込んで神の庭園へと帰っていく。

クロノの切り札である魔砲撃…

『セイント・スノー・ブレイカー』を完成させるため…

「義母さん！クロノの居場所知ってるんでしょ？何で教えてくれないの！？」

ここはアースラ。

そこでクロノの義妹のフェイトが数日前失踪したクロノのことについて教えてくれとリンディに迫っていた。

「知ってあなたはどうするの？言っておくけど今のクロノは連れ戻

すことは不可能よ？自分の本当に正義を見つけたから。」

「連れ戻すよ、このままじゃクロノは管理局に…そんなの絶対させない！」

フェイトの熱意に負けたリンディは渋々口を開いた。

「ハァ…クロノは赤い長髪の男の子に管理局のやm「赤い髪の男の子か、わかった！」ちょ、フェイト！？」

尋常ではないフェイトの様子にさすがのリンディも頭を抱えるしかなかった。

「お前達の凍てついたその心…それで俺の目的を阻むものを蹴散らせ…！」

そんなフェイトを水晶玉から見ている男がいた。

水晶玉には他になのはやはやても映っている。

「俺の目的は誰にも邪魔させない…！」

男の瞳はまさに凍てつく紅き氷のような目だった。

第四話　そろい始める役者

「クロノ！危ない！」

「え？うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁああ！！！！」

「クロノー！？言わんこっちゃない！！」

第四話　そろい始める役者

「まったく、誰がこんなことを…！」

クロノとルイスは先ほど落とし穴に落ちた。
ある管理世界にやって来て徘徊者（プロセス）狩りをしていたところ、この落とし穴に落ちてしまったのだ。

「やってくれたなぁ、悪魔の娘(こ)が…」

「悪魔？」

「あぁ。俺の古い知り合いだよ。その名のとおり悪魔が人間との間に産み落とした女の子だ。出て来いよ！藍奈(あいな)！」

「はいはーい♪藍奈ちゃん、参上！」

俺、参上！てきなポーズをとって出てきたのは紫の髪の自分達と同じ年くらいの女の子だった。

服装は黒いロリータファッション、靴下は黒と白のしま模様のニーソックス。

靴は黒い厚底ブーツという服装で背中には子悪魔的羽が生えている。

紫色の宝石が先に着いた薄紫色の傘型デバイスを持っている。

「藍奈～お前また悪戯しただろう？」

「ルイスお兄ちゃんがぜんぜんかまってくれないんだもーん！藍奈寂しかった！」

「お兄ちゃん？」

クロノはまじまじと藍奈を見つめる。

「あのな、俺はこいつとは兄弟じゃないよ。」

「そうだよ！藍奈とルイスお兄ちゃんは友達だよ！」

「そうか。僕はクロノ。よろしく。」

「クロノお兄ちゃんだね！私は如月藍奈！よろしくね！」

2人が握手をするとルイスが話しかける。

「藍奈、あの話…」

「うん。いろいろ考えたけど、藍奈の幻術や催眠、変身魔法、回復魔法はきっと役立つよ！」

「じゃあ仲間になってくれるのか！？」

「うん！やっぱり徘徊者（プロセス）さん達を苦しみから解放してあげたいし…」

「え？ということは…」

「これで3人！」

ルイスはそう言う。

「クロノを入れて5人に仲間にならないか持ちかけてたんだ。」

ルイスがそう言うとクロノは納得した。

「そうか、戦力は多いに限るからな。」

「あぁ！じゃあ、神の庭園に行こうか。クロノも必殺技完成させな

きゃだしな。」

「りょうかーい♪」

「わかった。」

神の庭園に帰るとルイスは藍奈を部屋に案内しクロノと砲撃魔法の練習を始めた。

「いくぞ！」

「あぁ！やってみろ！」

「セイント・スノー！…」

クロノの持っているデュランダルに冷気が集まっていく。

「ブレイカー！！」

魔力で見えない道を作り一気に発射しようとするが辺りに雪が降っただけだった。

「くっ、何でできないんだ！？」

「多分魔力の収縮がたりないんだ。おかげで威力が弱い。これは持ち主の力量次第だな。」

「あのさぁ、ルイスお兄ちゃん。藍奈がクロノお兄ちゃんの練習みてあげようか？」

「藍奈が？」

「うん！一発でできるようにしてあげるから！」

「わかった。じゃあ俺は向こうでデバイスのメンテしておくよ。」

「任せて！クロノお兄ちゃん！まずはね…」

そして数時間後

「セイント・スノー…ブレイカー！！！」

冷気の渦が発射され岩を砕く。砕かれた岩は見事に凍った。

「よし、できた！」

「凄いな…どんな練習したんだ？」

「簡単だよ！イメージ！クロノお兄ちゃんは魔力で冷気を作ってそれを貯めるっていうのが上手く頭で描けてなかったんだよ。それをイメージできる様にかき氷を作ってそれを手で固めるって言うのをやったんだ！」

「へぇー、相変わらずサポートの仕方上手いな…」

「どんなもんだい！」

胸を張る藍奈を見てクロノは戦いのことをひと時だけ忘れたのだった。

しかしそんなこともすぐ忘れてしまう出来事が起きる…

《侵入者、侵入者！神の庭園に侵入者、侵入者！》

警報が鳴り響く。

「侵入者！？」

「うわぁぁぁぁあ！！！」

そのとき家の扉をぶち破って誰かが入ってきた。

「イタタタタタ…」

「……なにやってるんだよ、トーイ…」

ルイスが呆れた様に呟く。

入ってきたのは黒い長髪の少年だった。

「アハハハハ…失敗失敗…」

「人のプライベートワールドに勝手に侵入しといて…なにが失敗だぁぁぁぁぁぁあ！！！」

「ヒデブッ！！」

ルイスの飛び蹴りが少年に炸裂する。

「ハァ、まったく！」

「あ、あのールイス？この子は…」

「トーイ・ボルテック。俺とは腐れ縁の仲だ。すでに年齢が大人なのにチビなせいか思考が子供で停止してる……戦闘狂の馬鹿だ。でも腕は確かだぜ。」

「酷いな！？」

「うるっせぇ！」

ちゃくちゃくと役者はそろい始めていた。

管理局と管理世界を大きく揺るがす事件に向けて…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3167z/

魔法少女リリカルなのは〜紅月の守り人〜

2011年12月14日14時47分発行